

# Bangladesh農村部の10代小児の境界型糖尿病の危険因子の検討—DOHaDの観点から—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 治子, Khan, Al Fazal, Hasan, S. M. Tafsir, Hore, Samar Kumar, Yeasmin, Sultana, 高梨, さやか, 神馬, 征峰 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003631">http://hdl.handle.net/10271/00003631</a>

## バングラデシュ農村部の 10 代小児の境界型糖尿病の危険因子の検討—DOHaD の観点から—

竹内治子<sup>1</sup> Al Fazal Khan<sup>2</sup> S. M. Tafsir Hasan<sup>2</sup> Samar Kumar Hore<sup>3</sup> Sultana Yeasmin<sup>2</sup>  
高梨さやか<sup>4</sup> 神馬征峰<sup>1</sup>

1. 東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学、2. バングラデシュ国際下痢疾患研究所 (icddr, b)、3. Organization for Population Health Environment & Nutrition (ORPHAN)、
4. 東京大学大学院医学系研究科発達医科学

### 【背景・目的】

バングラデシュでは小児の低栄養がいまだ多い一方、生活習慣病の増加も著しい。2 型糖尿病 (DM) の有病率は 10% と報告されているが小児の統計はない。今回の研究では、農村部の 10~19 歳の住人の DM の有病率・危険因子を検討した。

### 【対象・方法】

調査は共同研究機関の icddr, b の人口動態調査地域で 2017~2018 年に行った。対象者は無作為抽出した 10~19 歳の住人 360 名。322 名に身体計測・質問票調査を行った。298 名を早朝尿糖・毛細管血による空腹時血糖と HbA1c・食事後 2 時間までの尿糖の有無・妊娠でスクリーニング後、異常の認められた 60 名のうち 54 名にブドウ糖負荷試験 (OGTT) を行った。また 2001 年・2016 年の 5 歳児及び 2005 年の 9 歳児の体格、2018 年の新生児の出生時体重のデータを日本の成長曲線で検討した。

### 【結果】

OGTT で DM はなく、境界型 DM が 43 名 (14.4%) あった。境界型 DM の女児は、腹囲・腰囲が有意に低かった。他に危険因子はなかった。2001 年の 5 歳児・2005 年の 9 歳児は、身長 -1.5SD に対し体重は -2SD と体重 SD が身長より低かった。2015 年の 5 歳児も身長 -0.5SD に比し、体重は -1SD と身長 SD より低かった。2017 年の 10~16 歳児は、体重 SD が -1SD と身長の SD と同じであった。新生児の出生時体重は 2900g と日本とほぼ同じであったが、2500g 未満で出生する割合は日本の 2 倍の約 20% であった。

### 【結論】

10 代住人の境界型 DM の危険因子は、幼少期のやせと 10 歳以降の普通体格、低出生体重児の多さに起因するのかもしれない。